

本書を推薦する

「栄養療法はあらゆる医療の基本」と始めて言ったのは、かの紀元前古代ギリシャの医師ヒポクラテスという。私自身これを修飾して「万病に効く薬はない、しかし栄養は間違いなく万病に効く」と言ってきた。また「重要性が見直されつつある」という段階をはるかに越えていると思う。医療関係者のみならず患者はもちろん健康人でさえ、広く認識されているのが現状であろう。どこかで毎日マスコミは栄養の問題を取り上げている。現在の方法論的アイデアはルネッサンス時代には出揃っていたという。本当に栄養管理は古くて新しい問題である。

しかし、古い話はともかく、現在の臨床栄養のブームのきっかけを作ったのは外科医である。1967年の米国ペンシルヴェニア大学の外科医Dudrickらの「高カロリー輸液」の発明からと言える。これは最も重症患者を管理しなければならない外科領域で威力を発揮し、かつて「外科栄養」と呼ばれて抗生物質と並び20世紀最大の医療手段とさえ言われた。これを近代的臨床栄養の出発点として経腸栄養法も、わが国では'81年「成分栄養剤」の保険採用を契機に医師による栄養管理が一般化した。驚くべき効果をもたらした「栄養治療」が先行したが、「栄養診断(アセスメント)」の必要性が言われ、それまで主に勘に頼っていた栄養状態の把握に近代的手法が確立され、それに基づく「適正な質と量投与」、「病態別治療」へ発展したのは当然の成り行きであろう。

大熊氏は私と同様食道外科医である。氏との初めての出会いは、私が開発に携わった'77年3月開催の第1回成分栄養研究会と記憶する。30年来の付き合いである。私は関連研究会が、'98年日本静脈経腸栄養学会に発展移行し初代理事長として広くコメディカルに学会参加を呼びかけた。同時に医師の再教育「TNTプロジェクト」と「NSTプロジェクト」を2本柱として、わが国の「チーム医療としての栄養管理」の確立に努めてきた。それが、現在の盛り上がりにつながったと自負するが、いつも大熊氏は中心人物として活躍を続けてきた。

「キーワード」を本のタイトルに使用したアイデアはいかにもわかりやすい印象を与えるし、事実内容もそのように構成されている。執筆陣は現場に精通しているベテランばかりである。本書が職種を問わず広く栄養管理の現場で利用されることを願って心より推薦したい。

日本静脈経腸栄養学会名誉会長
(高知大学医学部名誉教授)

小越章平